

郷土の誇り「赤水」

重文決定に寄せて(上)

佐川春久



3月19日、国の文化審議会が長久保赤水(1717~1801年)の代表作である地図「改正日本輿地路程全図」(通称・赤水図)

など関係資料693点について、「国的重要文化財指定が適当である」と、文部科学大臣に答申した。

その具体的な内容を見てみると、「この資料群は、

長久保赤水の子孫に当たる複数の家などに伝來した赤水手沢の一括資料である。地図・絵画類が84点、文書類が56点から構成される。赤水の学問の内容、交友関係、生涯の事績を考えるうえ最もまとまった資料群で、江戸中後期の文化史、

・記録類が279点、典籍類が274点、書画・器物

地図史等の研究上に学術的な価値が高い」と評価されている。

この時代に地図を専攻していた学生たちは、伊能忠敬と並んで、赤水のことについても必ず学んでいたと

敬して知られる吉田松陰は1853(嘉永6)年2月11日、大阪から寒家の兄に宛てた手紙に、「『改正日本輿地路程全図』がなくては不自由なので、こちらで買いたい求めた。値段は参百八十文。そういう事なので送つていただきながら結構」と書いている。

江戸庶民が見た日本地図



長久保赤水の肖像画

を迎える」ことができてしまふにうれしい限りである。赤水については、生誕250年記念誌「地理学の夜明け前」(地理13-1、1968年)で特集が組まれている。そこには、当時の著名な地図研究者である秋岡竹次郎や室賀信夫、中村拓、海野一隆の各氏などの

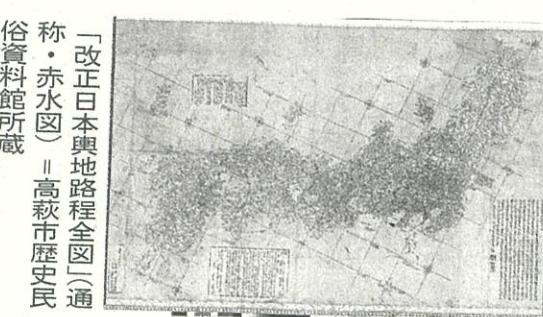
論文が掲載されている。この時代に地図を専攻している。そこには、当時の著名な地図研究者である秋岡竹次郎や室賀信夫、中村拓、海野一隆の各氏などの庶民や明治維新に奔走していた幕末の志士たちは、伊能図を見ていかなかった。浦賀にペリー艦隊が来た時

も、江戸の人々が見ていたのは「赤水図」であった。幕末の長州藩の指導者として、伊能忠敬が教科書に登場し、テレビや映画小説などで「初めて日本地図を作った人」と紹介されると、その状況が次第に変わつていったという。つまり、赤水の業績が、その陰に隠れて見えなくなつてしまつたのである。

最近、分かつてきた」とある。忠敬の伊能図は、江戸幕府の秘密の地図だった。そこで、幕府の要人は見ることができたが、江戸の多くの庶民や明治維新に奔走していた幕末の志士たちは、伊能図を見ていかなかった。

つまり、江戸時代の庶民にとっての日本地図は「赤水図」だったのである。今回の国的重要文化財指定が決定したのを契機に、江戸時代末、約100年間のロングセラーだった「赤水図」をもう一度見直し、正しく評価していただく必要があると思っている。

(長久保赤水顕彰会長)



「改正日本輿地路程全図」(通称・赤水図) 高萩市歴史民俗資料館所蔵